Matsumoto Dental University
Graduate School of Oral Medicine

1780 Gobara, Hirooka, Shiojiri,
Nagano 399-0781, Japan

第 215 回松本歯科大学大学院セミナー

日　時: 2010 年 5 月 20 日(木) 17 時 45 分~19 時 15 分

場　所: 実習館 2 階 総合歯科医学研究所セミナールーム

演　者: 末石　研二　氏（東京歯科大学歯科矯正学講座・教授）

タイトル: 外科的矯正治療の留意点 —形態と機能、そして心理社会的影響—

矯正歯科に訪れる患者の多くは審美的な主訴を持ち、社会心理的問題の軽減を求めている。そして私たちの持つ治療体系は、口腔模型、セファログラム、などの診断資料と精密な歯牙移動を行い得るマルチブラケット装置であり、多くの目標は形態の分析とその改善に当てられる。形態すなわち顎骨ならびに歯の配列と対向関係の改善が機能的な調和をもたらすことが期待され、ほとんどに良好な結果を得ている。外科的矯正治療においても近年の画像診断技術の進歩により形態的不正の部位と程度は定量的に判定され、手術精度の向上もあり、計画した改善がほぼ得られるようになった。しかしながら、術後あるいは保定時において、治療結果の安定を欠く症例を少数ではあるが経験する。そのような外科的矯正治療後の変化は、手術や矯正治療の技術的側面もあるが，治療結果に対する口唇や舌の機能的適応の如何に左右されるものと考えられる。さらに、口腔機能の不全が問題となる症例の場合、顎変形症患者のもつ口腔機能を定性的、定量的に評価し、術後の改善と形態的変化の関連を評価することが治療上欠かせないものといえる。

このような形態と機能の調和を評価するため、口腔機能に関する多くの研究がなされている。顎口腔機能は咀嚼、嚥下、発音に代表され、口唇、舌に関する口腔機能の評価には、1. ビデオ、X 線画像記録による運動動態の観察、評価、2. 圧センサーによる口唇、舌圧の評価、3. 筋電図による評価、4. パラトグラフによる舌動態の評価などが行われている。さらに広義の意味での機能として、口唇、舌の安静時および習癖時の動態が重要であるといえる。

今回の講演では，東京歯科大学歯科矯正学講座の治療計画の立案法を紹介し、また顎口腔機能の矯正治療による変化についての文献考察を行う。さらに更に時間が許せば，心理社会的側面も含めた外科的矯正治療の留意点についても検討する予定である。

担当:硬組織疾患制御再建学講座　山 田 一 尋